

起るべくして起こったことになる。興味深い見解であるが、しかしこの点に関する著者の立論は若干なされているにとどまり、今後様々に検討されてよい余地を残している。ともあれ、著者は論争が必然的に発生したとらえたうえで、異教古代における論争史・解釈史の展開の跡付けに全力をあげているわけである。本書は今後この方面の研究をおこなううえでの基本的な文献であり、しかも類書がないだけに、その意義は多大であり、また貴重であると言わなければならない。第2部、そしてプロティノスまでの包括的な *Tim.* 解釈史研究の刊行が待望される。

Louis Sala-Molins: *La philosophie de l'amour
chez Raymond Lulle*, Préface de Vladimir
Jankélévitch (Thèse Lille III)

Mouton, Paris, La Haye, 1974. pp. 303

野村 銑 一

Ramon Llull (C. 1235-C. 1315, ラテン名 Raymundus Lullus, 以下 L. と略記) のラテン語原典の中で最もよく揃ったものとして著名なのは、18世紀に Ivo Salzinger によって出版された *Raymundi Lulli doctoris illuminati et martyris Opera* (Moguntiae, 1721-1742, T. I-VI, IX-X. 第VII・VIII 巻は未刊) であり、最近 Minerva GMBH によって複製されたが、これには48の著作が収録されているだけで全著作の5分の1にも及ばず、また写本の比較考証もなされていないために現代の原典批判には堪え難い。ところが、今世紀も中葉になって Maioricensis Schola Lullistica から全30巻を予定して *Raimundi Lulli Opera latina* (Palmae Maioricarum, 1959-1967, T. I-V. 編集は Raimundus-Lullus-Institut der Universität Freiburg i. Br. が中心で、以後続巻の出版は Brepols に移行) が刊行されると相前後して、西欧での L. への関心は一段と高まり、L. 研究は長足の進歩を遂げ始めた。このことは、1957年 Maioricensis Schola Lullistica から L. 研究を中心とした雑誌

Estudios lulianos, Revista cuatrimestral de investigación luliana y medievalística が創刊され、その誌上で今日もなお数多くの研究成果が発表され続けていることから明らかである。とりわけ L. 研究が盛んな国は、スペインは言うまでもなく、フランス、イギリス、ドイツであり、M. Batllori, A. Llinarès, R. Pring-Mill, J. N. Hillgarth, E. W. Platzeck 等が輩出し、I. 研究の進展に多大の貢献をなしている。また、L. 研究史を調べる上で、R. Brummer, *Bibliographia Lulliana, Ramon-Llull-Schrifttum 1870-1973* (Hildesheim, 1976) が参照できるようになったことは喜ばしい限りである。これまでの L. 研究の成果は厩大であるが、その殆どが歴史的解釈を中心とするものである。L. Sala-Molins の研究はそのいずれをも遙かに凌駕していると言わねばならない。何故なら、彼は L. 同様生粋のカタルーニャ人であり、L. の厩大な著作を自由に読み、その鋭敏な洞察力でもって大胆かつ繊細な解釈を引き出すことが可能であり、実際にやってのけたからである。本書の功績は、L. の哲学・思想の根底にある dynamisme を洞察し、その dynamisme によって L. の哲学のみならずその終極としての愛の神秘学も哲学的に基礎付けられることの論証に成功していることと、その解釈を通して、M. Buber が唱えて以来その必要性が説かれ続けている対話の哲学を著者自身独自に展開して L. 思想の現代的意義を訴え、現代的視点から真の意味での歴史的解釈を試みていることにあると言えよう。

本書は次のような構成から成っている。すなわち、序文、序論、三部五章および結論、それに適切な文献目録が加えられている。各部にはそれぞれ標題が付けられ、第一部《Agentia》には I. Unité et pluralité; II. Pluralité et dynamisme: les Dignités が、第二部《Unificientia》には III. À la recherche de soi-même; IV. La découverte du monde が、第三部《Amantia》には V. La grande ascension がそれぞれ賦されている。

序文は *De l'amour* の標題の下に、最近いろいろな意味で本邦にも紹介されている著者の師 V. Jankélévitch が本書のために書き下したもので、本書の主題が見事に要約されており、本書を理解する上で非常に有益である。

序論では、まず L. の生きた時代の背景が簡潔に述べられ、知識の体系化・統一化を求める哲学的な論証家、異教徒との意志の疎通を願う実践的な対話の人としての L. 像が与えられる。次に、L. の思想の諸源泉について論じられる。この問題

に関しては諸説紛紛であるが、著者は、アラビアとの関係、ギリシャ・ラテンの伝統、ユダヤの伝統、南仏吟遊詩人風の文学の影響などの主だった説を手際よく紹介しつつ自らの立場を明らかにしている。すなわち、Platzeck は (Hillgarth は更に明確な形で) L. の知的環境として具体的に Richard de St. Victor, Abélard, Anselme, Al Gazali, Avicenne, J. S. Erigène, Maxime le Confesseur, Boèce, Denys, Proclus, Augustin (著者は Bonaventure も加えねばならないと主張する) の名を挙げているが、個々の思想家の L. への影響の細密な検証は困難で、実際に L. の著作に見出されるのはそれらの思想家との類似性だけであり、結局、L. の出発点はアンセルムス的であるが、その先は L. 自身の独創による歴大な知識の総合に他ならないとしている (pp. 20, 25)。また、第一部で展開される L. の所謂 *Dignités* とユダヤ神秘思想のカバラの本質的要素であるセフィロートとに関して特に詳細に論じ、両者は形式的には類似性が見られてもその内実は全く異なることを指摘し、安易な比較考察に警鐘を鳴らしている (pp. 20-24)。

第一部では、標題の示す通り、L. の哲学の核心は *agentia* にあり、そこに見出される根本的な思想が *dynamisme* にあることが論証される。詳しく見ると、まず「*agentia* の *existentia* に対する優位性」が L. の哲学の中核である (pp. 33, 41)。*agentia* は万物を支配する最高原理である。それ故に《*Operatio sequitur esse.*》という一般的な公理は、L. にあっては《*Esse sequitur operationem.*》と換位されなければならない (p. 79)。何故なら、L. が *action* を考察するとき、それは *agent* (ou *agissant*), *agissable*, *agir* の三つの相関の関係の結果、あるいはそれらの収斂する点としてであるからである (p. 42)。次に、一般的に存在の哲学は一性として神を認識するが、この *agentia* の哲学は一性は純粋な働き (*acte pur*) であるが故に多 (*plusieurs*) として認識する (p. 43)。従って、神は多でなければならない。ここに、所謂 *Dignités* (*Bonté*, *Grandeur*, *Eternité*, *Pouvoir*, *Sagesse*, *Volonté*, *Vertu*, *Vérité*, *Gloire*, *Perfection*, *Différence*) の必然的な多性の根拠があるとされる。第 II 章では、これらの *Dignités* の多性が具体的に論じられ、それらの *dynamisme ad extra et ad intra* (p. 79) が克明に描き出されている。

第二部では、第一部を承けて、神と同様に *agentia* に他ならない人間の自己認識と神および世界の発見としての *unificentia* が中心に論じられる。詳しく見ると、

agentia が existentia に優位する哲学においては、人間の魂は、existentia によってではなく agentia によって定義される。魂とはそれ自身の生である (p. 119)。すなわち、魂とは記憶、知性、意志の三幅対の agentia である (p. 121)。そして、この agentia が理性である。従って、L. にあっては理性と魂と生はシノニムである (p. 142)。神が agentia であるように人間も agentia である。人間は彼が為すところのものに他ならないのである (p. 142)。魂は自己を agentia へ完全に溶解しつつ、絶えず自己を再創造する存在である (p. 149)。従って、魂には、自己を無限に肯定し自身の自律とその自己認識の限界を無限に押しやる事が許されている (p. 172)。それ故に、魂にとって重要なのは欲望 (desir) である。欲望はそれ自身自己目的である。従って、L. の命令法は Spinoza の《Desidera, et vives.》である (p. 176)。ところで、人間は、agentia であることによって、自己が存在することと自己が何であるかを認識する (p. 172)。このことは必然的に神の発見を伴うが、そこに見出される L. の議論の展開は理性的であり哲学的である (pp. 186-188)。L. が選ぶのは信仰の道ではなく理性の道である。何故なら、魂が agentia であり続けられるために推論する能力が常に自由で活動的であることを L. は望むからである (p. 185)。信仰の真理を表すのは理性の堅固さと厳密さだからである (p. 192)。このことから、著者が大胆にも《theologia ancilla philosophiae》(p. 194) とまで述べているのは興味深い、評者には賛成し難い。L. がそれほどまでに近代的な意味での自由な思想家であったとは思われないからである。また、著者は大宇宙と小宇宙の統一に腐心し、著者自身極端と認めつつ神即自然の汎神論的傾向を L. に見出し、ここでも Spinoza の先駆と見なしている点も興味深い (p. 206)。

第三部では、agentia, unificientia の必然的帰結としての amantia について論じられる。この考察の対象は爾來神秘学の領域で扱われてきたものであるが、著者の主眼はそれを徹頭徹尾哲学的な次元で論究することにある。詳しく見ると、人間が agentia によって見出す神は至高の他性 (al térié suprême) としてのそれである (pp. 221-225)。そして、人間が unum et facere を求めてその神の至高の高みへと上昇するのは amantia によってである。愛は基体 (hypostase) ではなく、二者の対話における二元性 (dualité)、つまり関係である (pp. 248-249)。従って、神秘学の一般的な徴表とされる、靈的婚姻、暗夜、沈黙、没入、エクスタシー、過度の愛などの入り

込む余地は全くないことが繰り返し強調される。では、人間が神の至高の高みへと上昇するのは如何なる道によるのであろうか。それは不断の、しかし過度に近づくことのない用意周到な接近 (*propinquitās*) による探求である (p. 230)。従って、その条件は、魂の不断の覚醒 (p. 264)、その三幅対の *agentia* の均衡 (*equilibre*)、中庸の愛である (p. 268)。愛、それは最も純粋な *agentia* における存在の実現の実現である (p. 269)。そして、この愛は上昇の最終段階としての観想 (*contemplatio*) において完成される。そのメカニズムは意志によって拍車の入れられた知性の *dynamisme* に基礎付けられており、L. の観想は知性的なそれであると主張されている (pp. 270-277)。

結論は短いものである。人間の神との親密な対話としての観想は現実的な世界への根源的回帰 (*retour radical*) を促す。そして、神の *agentia ad foras* の機会としての人間の活動によって現実の人間世界を本来の世界へと再創造するための原型として結実するのが L. のユートピア思想であるとされる。そこに目指されているのは、普遍的な言語の使用、「術」の単純化による知識の一般化と統一化、それらを手段としての、宗教や文化の異なった人々の間での対話による交流などによる普遍的な平和な世界の確立である。三宗教が共存する13世紀の人としての時代的な制約はともあれ、L. の回心後の生涯における不断の著作活動と実践活動はそのユートピア実現のための弛まざる努力に他ならなかったと言っても決して過言ではないのである。

以上の概観からわかるように、著者は終始一貫哲学的に緻密な論理を展開して L. の哲学・思想の内奥に鋭く切り込み、新たな L. 像を見事に浮き立たせている。しかし、その L. 解釈は大胆だけに一・二の問題点が指摘されうる。第一に、本書の論理構成の大前提は「*agentia* の *existentia* に対する優位性」であるが、著者はこの大前提の納得のいく典拠を明確な形で示していないことである。従って、更なる検証が必要とされよう。しかし、その大前提からすると、L. の哲学・思想と実践活動の終極にあるといわれる愛の神秘学における *unio* は論理的必然により完全に否定されねばならない。これは比類のない斬新な解釈であるが、第二の問題点はまさにここにあると言わねばならない。何故なら、確かに *exstasis* に相当する語は L. の著作において見出すことができないが、*exstasis* を思わせる表現が見られるのは疑念の余地のない事実だからである。とはいえ、本書が L. 解釈の新たな方向づけの

強力な推進力となることは間違いないであろう。

Gordon Leff: *William of Ockham*

Manchester University Press, 1975. p. 666

坂口ふみ

この大著作の副題は *The Metamorphosis of Scholastic Discourse* という。いわば「スコラ学における語り口の変化」とでもいうことであろうか。この副題は著者のオッカム理解の中核をよく表現していると思われる。著者はオッカムを何よりもまずスコラ学者としてとらえ、唯名論者とか懐疑論者とかいうレッテルを拒む。オッカムをいわゆる「唯名論者」とすることへの批判は早くからあり、すでに1949年の *Franciscan Studies* 中の E. Hochstetter の “Nominalismus?” という論文がそれまでのオッカムの唯名論に関する論争を紹介し、特に1947年に刊行された R. Guelluy の *Philosophie et Theologie chez Guillaume d' Ockham* を批判して P. Viznaux の論文 *Le nominalisme au XIV^e siècle*, 1948 や著書 *Justification et Predestination au XIV^e siècle*, 1934 にくみしつつ、オッカムにおける概念や普遍が、客観世界や自然の構造に基礎を持つことを指摘している。Ph. Boehnen の諸論文もオッカムのこういう意味での實在論的経路に注意を向けている。「懐疑論」についてもたとえば1968年の *The New Scholasticism* では Fr. C. Richards が *Ockam and Skepticism* という論文で、オッカムの強く主張するのはむしろ外界の直接認識の明証性・不謬性であり、この意味では懐疑主義と対立することを指摘する。またオッカムが神の存在証明はじめさまざまな神学的論証を「論証」としてみとめなかったことも、彼の信仰に対する懐疑を意味するのではないことは、すべての論者のみとめるところである。

この意味では著者のこの主張は特に新しいとは言えないかもしれない。この書の特色は、オッカムの著作の全体を、「スコラ的問題の彼なりの考え直し」であるとす